

*Karl Marx*

*Friedrich Engels*

*Vladimir Illich Lenin*



*Rudolf Hilferding*

*Stefan Zweig*

# みんなで乾杯

長坂聰先生の思い出集



弔辞

昭和一九年卒竹村 連

おい、長坂よ！こんなに突然別れることになったとは全く信じられない 何とも言えない悲しみと切ない気持ちで一杯だ。

七月一三日の恒例の夏の文乙昼食会にいつもとかわらぬ元気な姿を見せてくれたが、二九日になって「誕生日ドックで尿に血液が混じっている事判明、精密検査したら膀胱に腫瘍があり、手術を八月一八日に受けることにしたが、病み疲れた顔は見られたくないので見舞は遠慮してくれ」と電話があつたので、二五日に奥様に手術後の様子をお伺いしたところ、手術の結果が予期に反し思わしくないのでことで心配していたが、二八日奥様より君が亡くなったとお知らせを受け、茫然自失、あの元気だった君が昼食会から僅か一ヶ月半後に亡くなられたとは、悲しみを通り越し何とも表現できないやりきれない気持ちだ。

昭和一三年四月、共に八雲が丘の府立高等尋常科に入学、水泳部、そして引き続き高等科、大学と爾後今日まで六七年の長きにわたり、深い友情で結ばれた付き合いだった。

君は高等科、大学時代に健康を損ない、僕は兵役で遅れ、二人して昭和二五年三月、クラスで最後の大学を卒業した。

君はジャーナリズムに強い関心をもっていたが、健康上の都合から大学の社研にのこり、その後教育大学、ドイツ留学、大分大学、名古屋名城大学の教職を勤めた。君の経済学者としての業績は良く知らないが、学生時代もっていたやや左傾的な思想から基本的にはマルクス経済理論に基づいていたと理解しているが、それは決して過激なものではなく、又、自己の思想を押し付ける事はなく、人の意見もよく受け入れたが、自己の信念にはなかなかガンコだった。教育大学の筑波移転に際し、相談を受け反対したが、人生初めての都落ちを覚悟の上で、断固自己の信念を通して大分大学に転職した。講義はなかなか人気があつたようだ。大分大学を停年退官する直前、君の招きで大学を訪問し、君の学生の話から、地方都市大分での最高学府の教授とゆう立場で、持ち前の人付き合いのよさから地域社会に溶け込み人脈を広げ幅広い生活環境をエンジョイしていた事がよく理解できた。

又、君は府立高校の学生であつたことに非常に高い誇りと愛着をもっていた。君の八九年一月の大分大学定年退官記念講義の冒頭に府立高校時代の学生生活を紹介して、この学生生活が学究の徒としての自分の人生に非常に大きな影響を与えた事を示唆している。

更に独逸留学を通じて磨き上げたドイツ語の能力が経済

学者としての研究に大いに役立つた事は当然としても、大  
学教授の職を引退した後でも畑違いの独逸文学者シュテフ  
アンツヴァイクの短編小説集を翻訳したことも、府高乙時  
代の石川教授によるツヴァイクのドイツ語授業の思い出に  
なんらかのつながりが合ったのではないかと思っている。

君の人付き合いのよさは、本質的には深い愛情に基づく  
ヒューマニズムにあると思うよ。世話好きで、はにかみや  
で、他人からでしゃばりと言われるのではないかと気にし  
ながらボランティア的活動に積極的に参加、否むしる活動  
のリーダー的な役割を果たして来た。昨年の秋の府立高校七  
五周年記念事業で君の果たした役割、パネル・ディスカッ  
ションでの司会、記念号「八雲」の編集、出版、八王子南  
大沢・都立大学総合運動場でのファイヤーストーム等々、  
いずれも君の積極的活動により実現したことは皆が認めて  
いる。

一土会での活躍、又しかり。俺はでしゃばりではない、  
東のオッサンに尻を叩かれ、旧制の人が少ないので止むを  
得ず参加するのだと言いつつながらも、会のリーダー的役  
割を果たし、毎年開催される高校寮歌祭で記念祭歌「銀扇  
空に」の音頭を取り、全国の高校の間に「府立の銀扇空に」  
を広めた。テレビで放送された君のあの姿は今でも眼に焼  
き付いている。この歌は我々水泳部が昭和一七年、戦前最

後のインターハイで水球で全国制覇を成し遂げた時、東大  
で開催された前夜祭で初めて全国高校代表の前で披露した  
時の感動が、君の「銀扇空に」に抱く気持ちに關係がある  
と思われる。

又、君は事情があり遅く結婚したこともあり、家族をこ  
よなく愛していた。特に娘さん、三人のお孫さんの話をす  
るときの、あのシャイな、よきパパ、ジジの話しぶり、顔  
つきはほのぼのとした君の人柄と家族の暖かみを感じさせ  
た。

今日は場所柄君を送る歌を歌うことは出来ないが、いず  
れ近いうちに君の好きな歌を聞かせる機会を考えているよ  
うだ。楽しみに待っていてくれ。

何しろ六七年の長い付き合いだが、あまりにも突然の別  
れで、思い出があれやこれやと浮かび出て来て纏める事が  
できない。

もう、腰や首の痛みも亡くなったことだろう。静かにお  
休みくださいと言っても、君のことだ。先に行った東のオ  
ッサン、安部英三等と一緒ににぎやかなクラス会を仕切っ  
てくれることだろう。

いずれ参加するから、それまでは、さようなら。

(平成一七年九月二日、府立高校一九年分乙友人代表)

## 長坂聰(旧制都立高校)先輩を偲ぶ

二五年卒 菅野義信

長坂さんは、旧制高校の尋常科を通して、私の五年先輩に当たり、しかも運動部として同じ水泳部に属しておられました。旧制の高校は中学の四年からの受験が可能で、五年が卒業ですから、四年から高校へ進んだ人は、四年修了(四修)と呼ばれていました。小学校から、旧制高校の尋常科に入学すると、四年修了後、入学試験なしに、高等科である旧制高校生に進学が出来ました。

旧制高校は三年が常態でしたが、戦争が激しくなった昭和十八年から三年間の昭和二〇年までは高等科が僅か二年に短縮されました。長坂さんは旧制高校の高等科には、確か、二年しか在学出来ない年代であったと思いますが、尋常科と併せると、六年間、高校生活をされたことになりました。

私は昭和十八年の尋常科入学ですから、当時、長坂さんは、卒業一年前の高等科二年生に在学されていたことになります。しかし、運動部の水泳部では、尋常科と高等科では、別々に練習しておりましたから、当時の水泳部での記憶が、あまりありません。長坂さんも私もあまり熱心に、水泳の練習はしていません。

高校卒業後の私は新潟大学に進学して、東京を離れまして、何年か一回くらいしか、母校のプールで開催される卒業生OBの会には出席しておりません。当然、長坂

さんとは、それ程親しい仲とは言えない関係でした。

新潟大学の医学部からインターンを経て、大学院医学研究科を修了した私は東京医科歯科大学の助手になることが出来ましたが、折しも、一九六〇年の安保闘争の真つ最中で、ハガチー訪日妨害、国会議事堂周囲のデモ隊の闘争、樺美知子の国会議事堂構内での死亡事故と騒然とした東京の状況はそのまま大学にも少なからぬ影響を与えていました。

その後、何時の頃からか、旧制高校の寮歌を歌うグループが各校卒業生の間に育ち、都立高校では毎月、第一土曜日に有志が集まり、今時、アナクロニズムと、この会を嫌う方もありますが、寮歌を歌って語り合うグループが出来、「一土会」と名づけて今も続いています。

この会の発会当時から、長年、世話されていた方が、今は病気で引退された方ですが同期で、会社の仕事で広島に來られた時、大学停年退職間際の頃の私を訪ねてくれました。私も昭和二〇年の四月から、八月の終戦を挟んで、両親が疎開してしまい、尋常科生ながら、東京に在住する為に、特別に一年間、北寮と西寮に過ごしたので、寮歌には特別の親しみを持っておりました。世話役の渡邊さんのお誘いもあり、年に一回くらい、他の出席すべき会合との都合で、上京の機会がある時には、一土会に出席することになりました。

渡邊さん以外に、元水泳部の後輩ということで、長坂さんには忽ち、親しくして戴いた。ひとつには、大学教師と

いう共通の話題を持ち合わせていたことも親しくして戴いた理由がもしれません。

その内、長坂さんは、実は自分には小説が一つあるが、読んでみてくれるかとお話があり、原稿をお借りし、拝読した。長坂さんは上海のお生まれであった。その小説の詳細は、残念ながら忘れてしまったが、上海と東京の間での恋愛小説であったように思う。私は上海には二回、行っているが、最初の一八九〇年の訪問時には、上海には「田舎の香水」の香りを含めて、多くの日本の戦前の面影が残っていた。

どういう訳か。私の手許に、戦前（昭和十三年）の支那（シナ）写真大観という、粗末な一部色付きの写真集があり、長坂さんにお貸しした。返却時の手紙が今も手許にあり、数葉の上海の写真には、見覚えのある「黄浦江の河岸（バンド）には父が勤めていた三井館門が見えるし、第一次上海事変の折に避難したカセイ・ホテルの一二階建ての建物も見えました」と書いて頂いた。探してみると、手紙の日付は、六年前の平成一二年三月二八日とあります。

以来、一土会の二次会にもお誘い戴き、お話しする機会も少なくありませんでした。

長坂さんは、人の嫌がるようなことは、決して話題にされず、なんとなく気配りがあり、人の話も良く聞いて戴き、何時も気持ち良く、廣島からでも、この会に出て良かったと思うことばかりでした。態々、廣島から上京して、同窓会などに出席しても、嫌な思いをすることも、少なくない

こともありました。長坂さんとの邂逅では、一度も、嫌な思いをしたことがありません。それだけでも、この一文を長坂さんに捧げたいと思います。

長坂さんは何処かに、後輩に対しても、礼節を重んじ、温かみのある人の品格をきちんと保持されていたと思う。それがどれ程、私自身にも、他の懇親会などに出席した折の話の話題を選ぶ時、又、手紙等でも他人の嫌がるようなことは、決して言うまい、書くまいと注意している原動力になりました。

一方、水泳部には、在学時代から「ワイ談」という性に關する小噺があります。長坂さんは、時折、とっておきの「猿談」を一土会の二次会で披露してくれることもありました。四角四面だけではないユーモアも、持ち合わせておられました。長坂さんの講義がどんなものであったか、残念ながら講義を聴いたことがありませんが、それ等のことは、教え子の皆さんが書かれることでしょうか、眠くなるような講義ではなかったことと思います。

一昨年の秋、都立高校の創立七五周年記念会があり、長坂さんの編集された刊行物の記念号「八雲」には、恩師の一人の思い出を掲載したが、誤字などの訂正には長坂さんのお世話になった。

昨年の八月六日の富山高校との合同一土会には、長坂さんは体調を崩され、欠席されたとの報があり、当然、見舞い状を差し上げた。しかし、その後の知らせは八月二八日に急逝されたとの、誠に、残念な訃報でありました。

長坂さんは、多分、私の見舞い状は見ることなく、先に逝かれてしまった。その見舞い状はフロッピーディスクの中に眠っている。

昨年一二月三日の一土会には、何年振りかで、出席したが、長坂さんの姿のない一土会は何とも、私にとっては淋しく、やりきれない会であった。会場のホテルに泊まったが、翌日からの気象情報を見て、一二月には珍しい、西日本の寒波の来襲と大雪の報に、慌てて、在京中の滞在を全て、切り上げて、出来るだけ早い時刻の新幹線で、廣島に帰った。雪タイヤに代える余裕があり、月曜日の通勤が何とかあったが、長坂さんの気持ちに移ったような、この冬の各地の大雪である。

ご冥福を祈ること、切なるばかりのこの頃です。

（廣島大学名誉教授、介護老人保健施設「シエスタ」医師）



## 長坂 聰君を偲んで

昭和一九年卒村中正治

長坂聰君が亡くなった。一九三八年に中学に入ってから高校、大学と同じキャンパスで学生時代を過ごし、中学から高校にかけて「泳ぐ」という運動部生活の中で自然に体にしみ込んだ記憶を共有しあつた友人の一人である。付け加えるならば、大学を卒業したあと、それぞれ所属した研究の場で、若い頃自分で決めた研究テーマを変えなかつた、あるいは持ち続けようとしている共通点もある。

彼は学生時代に苦しんだ二回の闘病生活の中で会得したのである。自分自身が当面している健康上の問題あるいは症状について、具体的に対応の判断は自分で決めるといふスタンスを変えなかつた。胸部疾患の既往のため、それが全快した後も肺の機能は確実に落ちていた。しかし、食欲がない、あるいは循環器系に異常があるとの訴えは聞いた事がなかつた。それらのあたりに、彼が病気に負けずにあれだけ背筋の通つた長命を保つた所以があると思う事がある。

一回だけ彼の顔色が変わつたことがあつた。腰痛を訴えて、私が週一回外来診療を担当していた診療所に訪ねてきた時のことである。その頃彼が助教授を勤めていた東京教育大学の筑波移転問題

で多忙な日々を送っていることは噂で聞いていた。腰のレントゲン写真を撮影させ、それができるまでの間、いろいろと話を聞いた。その運動は何時まで続くのだとの問いに、「移転中止が決まるまで頑張るが、それがだめなら教育大を辞めることになるだろう」との返事が返ってきた。その時はどうするのだ、あてはあるのか、との問いには「あてはないが本屋ならやれる」とこたえた。その一言は放つておけなかつた。

レ線写真が出来上がるのを待つて、以前撮つた私自身の腰の写真と並べて、どこが違うかを指摘してもらつた。案外彼の指摘は的を射ていた。だが其の過程で、彼は自分の腰椎が私のそれと較べて甚だしく変形しているのに気が付いていた。この腰では本屋は続けられない。本の重さはよく知つているだろう。長坂には、大学の雰囲気の中で自由に研究し、学生相手にゼミをやる生活があつている。講義の時はコルセットをつけるのが良い。水泳は遊び程度ならかまわない。と伝えたのをおぼえている。

それから大分に発つて、私は三〇年以上勤めた大病院を離れて静岡県に近い神奈川県下の病院に院長として赴任することになった。私自身は、東京に近く経営も順調な公的病院で、時間的余裕もあり、そう苦労することもなからうと考えていた。だが赴任早々に起こつた事件は、そんな甘さ

を吹き飛ばすものであった。まだ二ヶ月はたつていなかった。病院のナース寮に真夜中男性が侵入し、大阪にある同系の病院から派遣されたばかりの若いナースも含めて三人のナースたちを人質に立てこもる事件が起こった。それはテレビでも実況的に報道された。事件は明け方には無事に収まったが、翌日から院長の仕事は、厚生省をはじめ関係各施設を回り事情を説明して詫びることであった。いつの間にかナース寮の管理方法の欠陥も含めて、院長はこの事件の責任者にされていた。それからしばらくして突然、長坂君から電話がかかった。心配なので一度様子を見に行こうと皆がいつているが、空いている時間を教えるという電話だった。

約束の当日、まだ仕事で病院の事務長と話をしている最中に電話がかかった。受付に変な男たちが四人来て大きな声で「院長はいるか」といっています。という連絡であった。やくざでも来たのではないかと疑ったらしい。後で知ったことだが、当時その地方の別の病院ではやくざがらみの事件が起こっていた。

一緒にいた事務長が心配して、先に会ってきますといつたとき、私の頭にひよつとすると、という想いがはしつた。彼らが長坂君を含めた中学、高校時代の水泳グループであることはすぐわかった。始めは驚いた事務長も、あきれながらも人質

事件で被害に合ったナースたちはすでに精神的にも立ち直り、職場に出ていることを告げてくれた。彼女たちの派遣元の病院の院長がその日のうちに駆けつけ励ましてくれたことを聞いたとき、彼らの表情に安堵感が浮かんだのをおぼえている。

話は十分にできたが、受付で、大声で騒いだのが元エリート官僚で、けしかけたのがひとり紳士然としていた長坂君であった事を知った病院の職員たちの受け止め方は複雑であった。そのことがきっかけとなって私の在任中、その二人とも体の具合が悪くなつた時にその病院に入院し治療を受けた。一人は塀から落ちて骨折し、そして長坂君は持病の腰痛で講義ができなくなつた時である。二人とも入院中は借りて来た猫のようにおとなしかった。

長坂君とはそれから何回も会つた。その度に一度聞いておかなければと思つたことがある。それは、長坂は一〇〇年以上前に書かれた本の研究に文字通り一生をかけたようとしているらしいが、それで本当に満足しているのか、という疑問である。答えは永遠に聞けなくなつたが、彼が亡くなつて半年経つた今、長坂も私に同じような質問をしたかつたかもしれないと思うようになっていく。偶然の一致であるが、私の長年の研究テーマのもととなつたアナフィラキシーという生物の持つ特異な免疫現象がはじめて記載されてから、今年はず



度一〇〇年目になる。

（東京大学医学部一九四九年卒、湯河原厚生年金  
病院名誉院長、元東大病院物療内科助教授）

## 長坂君を偲ぶ

昭和一九年卒 中原 猛

文乙の友人たち

長坂君と私は昭和一三年府立高校尋常科に入学して以来、高校でも同じ文乙（文科乙類）に進み、大学でも共に東大経済学部と、戦中戦後の苦難に満ちた青春時代を一〇年近くも親しい友人として過ごした。昭和一九年秋、文乙を卒業した四〇人のうち全く同じコースを辿って社会に出たのは八人と決して少なくはない。ただこの八人がお互いにへその緒で結ばれているような親近感を抱き続けて来たことは事実だ。昭和三〇年代のことだが関西で勤務したとき、グンゼの稲葉俊夫君（京都）東京海上の佐藤信君（神戸）と西松建設の私（大阪）の三人は、三都物語などと称して順番に夫々の街で呑み会を開いた。この会は一義もなくまとまって爾来やく八年、私が東京へ転勤するまで一回の休みもなく続けられた。京都のたん熊など普通は行けない一流店や、神戸のうら街のバーなど今でも記憶の底に鮮やかだ。しかも府立高校を卒業したころ誰ともなく言い出して奥日光まで旅をしたことがあるが、その時の数人のうちの三人でもあった。私は長坂君の追悼文を書くにあたってこんなことを思い出し天の配剤の不思議さを考えずにはいられなかった。

八人のうち最も恵まれた人生を送るべく約束されていた日興證券の遠山直道君はフランスの飛行機事故で亡くなった。

彼とは最も遠い距離にあった筈の私だったが、社会に出てからは思わぬ出会いが数多くあった。遠山君が卒業直後につくったダヴィド社という出版社で映画をつくったことがある。どういいういきさつだったか忘れたが遠山君は銀座のライオンに私を呼んで、その映画の主演女優の宮城由美子に合わせると言う。宝塚出身で映画「宮本武蔵」のお通役を演じたこともある当時の人気女優である。その後、遠山君とは随分と一緒に呑み歩いた。小林君と一緒に埼玉の遠山君の実家に行ったのもこの頃である。

そう言えば、小林君も中学は違ったが高校・大学と同じ道を歩んだ仲間の一人である。一緒に何遍もゴルフをしたり、美人の奥さんの手料理をご馳走になったり、工場の仕事を貰ったり、オオクラのヘルスクラブを紹介されたり随分とふれ合いがあった。彼が肺がんで死んだとき奥さんも居らぬ慶応病院の病室で、私一人が慌ただしい医師たちの動きを追い臨終に立ち会った。小林君に高橋嘉孝（ドイツ語の教授、横綱審議会のメンバーとして有名）のラジオ放送をテープにとつて聞かせたのも私であった。それは人間は死ぬ前にはその予兆を感じて必ず普段とは違う行動をとるといった主旨のものであった。このテープはどういう訳か八人のうちの一人である皆川光男君に廻され、小林君が死んでから後、私は皆川君にコツピドク叱られた。

話はもとに戻る。遠山君が日興證券に戻ってからのことだが、私がたまたま会社の出張で高松に行ったとき、もう寝よ

うと思つていた宿屋に思いもかけぬ遠山君から電話がかかつてきたことがある。青年商工会議所の東京代表（？）として四国を訪れていた彼は、地元のメンバーにつきまとわれて往生していたらしい。すぐ来てくれとのことであつた。私の助け舟で楽になつた彼と遅くまで呑み続けた。翌日か翌々日の帰りの飛行機でも一緒になり、東京に帰り着くまで腹を割つて話し合つたものである。フランスでの飛行機事故では助け船の出しようもなく歯がゆい思いをした。お悔やみに行つた遠山君の家で会つた彼の長男はどういう偶然か、私の息子と慶応普通部の同級生であつた。

佐藤君は神戸から東京に戻つて間もなく、国立病院の医師の診断ミスと奥さんは泣いた。もう二〇年近くも前の話である。

美男子で秀才の誉れが高かつた近江谷左馬之介君は長いこと咽頭ガンで苦しんでいた。私を不動産のコンサルのように思つていたフシがある。九大教授の頃、私に土地問題で相談を持ちかけて来た。竹村君が取り仕切つている三ヶ月毎の同級会でも、近々執筆活動に入りたいたので麻布あたりに適当なマンションを探してくれないかと頼まれた。私が程々の物件を見つけて連絡しようと思つていた矢先に訃報が届いた。この同級会は近江谷君が出席した最初で最後の同級会となつた。お通夜が行われた建長寺の闇の深さに、私は式場を訪ねあぐねてほとほと困惑した。式場の場所を聞くため訪れた宿坊の一つで、僧とも俗とも分からぬグループが大勢で酒を呑んで

いる姿にやや鼻白んだが、それでも何とか尋ね当てる事が出来た。外国旅行中で死に目に会えなかつたと泣く奥さんは、多分彼の完全回復を信じていたのであろう。若い娘さんは驚くほど尋常科時代の近江谷君と瓜二つであつた。

安部英三君は最初、防衛（調達）庁に入った。西松建設に入った私は青森県の三沢基地に赴任し、維持管理という部に配属された。ここは米軍の兵舎や住宅のリフォームを担当しており、私はガラス一枚とかドア修理とか細々した請求書作りに日夜追い回された。その請求書は毎月、東京の調達庁に持つていかれ三沢工務事務所三〇〇人の職員の給料を賄つた。安部君が調達庁を辞め山下（水野）惣平君のアラビア石油に入った頃、私も東京に戻つていた。彼がアラビアの現地に行くとき、僅か一、二週間の間に彼のために何遍も送別会を開いた。そのうちの一回は、現在私の住んでいる西新宿の十二社に昔あつた三業地であつた。アラ石はその頃まだ石油を掘り当てていなかった。数十年を隔てアラ石を辞めた安部君と西松建設を辞めた私は、大和建設という二部上場の小さな会社で一緒に仕事をする偶然に見舞われた。大変平和な日々であつたような気もするが、大和建設は私が辞めてから数年後につぶれ、安部君も間もなく亡くなつた。

長坂君が逝つて八人は三人になつた。皆川君は相模原に、稲葉君は奈良にいる。

尋常科のころ

これは長坂君が亡くなる半年前位のことだからつい最近と  
言っただろう。彼と二人だけで話していた時のことだ。

「俺の兄貴は二人とも浦高でね」となにかのついでにポツン  
と言った。弟の昶君が府立の一年後輩だったことはよく覚え  
ているが、男ばかりの四人兄弟で、二人の兄さんがともに浦  
高というのは初耳であった。そう言えば長坂君の結婚式には  
二回とも出たのに親族を紹介されたことは一度もない。若し  
かして身内は誰も呼ばなかったのでは、と今は考えている。  
偶々浦高出の暮友と「暮（郵便暮）」を続けているので訊ねた  
ら、浦高には府立のように立派な名簿はないらしく、「分から  
ない」とただ一言返事がきた。長坂君は父親については「銀  
行屋でね」と漏らしたことがあるが、母親については「女も  
年をとると・・・」と手厳しい表現をした。何れにせよ兄弟  
を四人とも旧制高校に入れるというのはご両親にかなりのこ  
だわりがあったのではと想像する。

それに比べると私などが府立高校に入ったのは全くの偶然  
というしかない。私が六年通った荏原区立の小山小学校は日  
本初のアーケード商店街（小山銀座）に近い、いわば商人の  
街、商人の子弟の小学校であった。進学については極めて消  
極的で、出来る子は府立八中、出来ない子は攻玉社へとい  
うのがお定めのコースであった。我が家でも、暮を打つなど叱  
られることはあっても勉強しろと言われたことなど一度もな  
い。三つ年上の兄が攻玉社に行った経緯は全く知らなかった  
が、自分は間違いなく八中には入れるだろうと多寡をくくっ

ていた。府立高校など名前も聞いたこともなく、どこにある  
かどんな高校であるかも全く知らなかった。

六年生の三学期になってから同じ級の○君が府立高校を  
受けると聞いて「私も」と申し出た。私の組は教師運に恵ま  
れず、一年生の時は良かったが二年からは毎年のように先生  
が変わった。六年の時も最初の先生が病気とかで担任が変わ  
った。変わってまだ間もない教師は「○君にはコネがあるけ  
ど・・・」とコネのない私にはムリであることを言っただけ  
うとした。しかし流石に気が咎めたのか「仕方がない、君も  
受けてみるか」と言い直した。それから一、二ヶ月私は猛烈  
に勉強した記憶はないので、相変わらず友人の家や近所の暮  
会所で暮ばかり打っていたような気がする。結果はやはり  
○君は合格、不合格であった私は八中に入った。

西小山の自宅から武蔵小山駅前に通う私の胸の中には、何  
かモヤモヤしたものがくすぶっていた。ところが一週間程た  
って府立高校から補欠でどうかという問い合わせが来た。父  
が私の意向を訊いてからOKの返事をした。一も二もなく府  
立に行きたいという私に、父は電話を引いたからだよと意味  
不明のことを言った。府立の入学式には母親が付き添い、八  
中の制服で行った。担任の教師には一言の挨拶もなかった。  
これには後日談がある。三年の時だったが府立高校に入試  
汚職があつて教頭が当局に検挙された。当時一般の府立中に  
先駆けて入試が行われたため受験倍率が二〇〇〜二五倍と非常  
に高かった学校では、どうやら長年にわたり八〇名を選ぶ際、

試験の成績によらない枠をかなりとつていたようである。補欠という屈辱的な入学式を味わった私にはムネのつかえが一挙に吹き飛ぶようなニュースであった。

この喜びを私はプールで長坂君にぶつけた。しかし彼の反応はやや腑に落ちない所があり、私はこの話は長坂君だけに止めた。今にして思えば旧制高校一家としての複雑な思いがあったのだろう。彼が『ツヴァイク短編小説集』という長年暖めていた翻訳を出す前に『旧制高校』というアナクロ的な著書を物にしたこともやはり旧制高校一家のなせる業ではなかったかと理解している。

キャプテン

長坂君が水泳部に入ったのは確か二年の時だったと思う。一年の時から入って七年制大会にも出場した（それは成城の五〇mプールで行われ、二〇〇m背泳でも皆から四〇mも遅れて泳ぎ着き、満場の拍手を浴びた）私にとつてみれば新参も良いところである。当時、私の年次ではクロール宮本、ブレスト村中、服部、松岡（竹村）、大山、バック中原というメンバーで、構成が悪い上取り立てて速い選手がいなかった。一年後輩の根来、小池、作間といった連中に追い立てられる有様であったから、宮本君より一寸速いクロールの長坂君の入部は歓迎された。

当時の水泳部は、まさに非科学的な泳げ泳げの一点張り、泳法の指導、筋トレなど一切なし。プールの両サイドには先輩が床ぶらしを持って見張っており、途中でサボる奴は頭を

こすつてやるぞというオドシの構え。速い選手が育つ筈がない。最大の目標である七年制高校（東京、府立、成蹊、成城、武蔵、学習院）の大会でも優勝できる選手は稀であった。

現在の学生の速さとはけた違いであったが、戦時中の食糧難などを考えれば当然と言えよう。速い選手のいないチームは勢い水球に走る。水球はまだ寒い五、六月とか、シーズンオフの九、一〇月に練習が行われた。私の学年では、クロールの長坂とブレストの村中が私と同じくややマシな選手であった。そんな状況の中で、三年の夏のシーズンの終りだったか、それとも四年の初めであったか長坂君がキャプテンに指名された。

私にとつてみれば「エッ」という決定であった。後年、長坂君の語つたところによれば、それは一年上の須崎キャプテンではなく二年上の田中（東銀副頭取）キャプテンを中心とする決定であつたらしい。私は教師仲間、特に教練の教官の評判が悪かつたのが原因だったという。わざわざ草履ばきで教練の時間に出席する私の評判が良からう筈がなかった。

「お前が俺の言うことを聞かないので往生したよ」というのが晩年の長坂君の述懐である。

おまけに四年になってから長坂君は体をこわし、欠席がちとなつたような記憶がある。四年の時、七年制のトップパナのメドレーを一位で泳ぎ、一〇〇、二〇〇m背泳で優勝、水球でも尋常科の時から高校の試合に出ていた私だったので、さぞ長坂君はやり難かつたに違いない。しかし私は、長坂君と

村中君とは特に仲が良かった。中野区新井町六二二と当時の長坂君の住所を今でも覚えているのは、この二人と私がペンフレンドでもあった証拠である。村中君の住所は、確か麹町区富士見町であった。番地まではどうしても思い出せない。

状差し

いまはメールの時代なので状差しといってもピンと来ないが、昔はたいてい家に状差しというものがあって、壁や柱にぶら下げておき、手紙やはがきなどをポイと入れておいたものである。

尋常科の二年か三年のころ、松岡先生から木工の宿題が出されたことがある。先生は漆絵の巨匠といわれた方で、英語のガツパイさんや、城ヶ島の雨での作曲で知られる音楽の築田貞先生と共に印象に残る名物教師の一人であった。私の尋一乙の時の担任で、その温顔とやさしい眼差しは今以て忘れがたい。私は例になく張り切ってみたものの、自分の不精さや不器用さを考え、もつとも簡単な板四枚でできる状差しをつくることにした。早々の仕上げ、当時は組が違っていた長坂君に尋ねたところまだ何もしていないとのこと。「それじや俺もう作ったから共同制作にして仕上げようか?」「うん」ということで、私より更に不器用な筈の長坂君と私の名前を大きく並べて彫ったものである。この状差しはその後、六〇年も私の手許にあったが、その出来たるやひどいもので、まともに使えぬ代物ではなかった。何しろ分厚い封筒なら良

いが、はがきなどは入れたとたんにストンと落ちてしまう。底板をつけるほどではないが隙き間が空いていたのである。先生から返って来た答えは乙、いま考えても甘い採点だったと思う。

ところが長坂君に聞くと甲だったという返事だ。私は思わず「ウーム」と唸って口がきけなかった。先生はいつも「学生時代は良い。まずまず順当な評価をしてくれますからね。社会人となるとそうはいきません。努力しても報いられず、良い作品を作っても褒められるとは限りません」と言っておられたので、まさにこれは社会人の評価ではないかと思ったものである。

高校から大学へ

この期間、われわれにとってはまさに悲劇の時期であった。それでも悪いことばかりではなかった。高校一年（昭和一七年）のインターハイの水球で府立は初優勝した。宿敵東高を一高のプールで破った時、キャプテンの田中は東高の松浦（後に代議士）と一緒に退水となり、二年の須崎が決勝のシュートを決めた。このシーンは生涯忘れることが出来ない。後にも先にも府立の運動部がインターハイで優勝したのはこれ一回である。一八年にはインターハイはすべて中止された。

目標を失った水泳部は夏の練習を止め思い思いの休暇を過ごした。北海道旅行を親にすすめられた私は良い体験ができた。この頃の長坂君の消息は全く聞いていない、学校には知



らぬ間に多勢の兵隊が駐屯するようになり、戦争が急に身近に迫った感じがあった。入れ替わるようにわれわれはあちこちへ勤労働員に出された。

その頃のことである。二年の学期末試験を控え、「今年も試験をサボっちゃおーかな」と長坂君に話しかけたところ、彼は目を丸くして「とんでもない」と反対した。「お前は去年も及落会議の第一号だったんだぞ。成績もすり切り、第一欠席日数が多過ぎて。担任の石川練次（ドイツ語）が助け船を出してくれたからやっと助かったんだ」と言う。成績の方は計算の上だったけど、まさか欠席日数で引つかかるうとは思わなかった。それも石川教授が「彼は欠席届けをちゃんと出している。出処進退明らかなり」と当時の流行語で助けくれたらしい。

「ところでお前は何でそんなことを知ってるんだ？」と逆襲したところ、「俺はお前よりもっと危ないと思ってる。職員会議の扉の前で聞き耳をたてていたんだ」という返事だ。シャケという仇名の不器用な彼が、どんな恰好である重厚な扉の前に立っていたのか、いまだ想像することが出来ない。二年半で修了したわれわれの高校生活にとって、この二年の期末試験は極めて重大に意味をもつことになった。何とか二人とも同じ大学に入ることができてメダタシメダタシであったが、私としては彼のこのときのアドバイスが感謝しきれぬ貴重なものであったことを折に触れて思い出すのである。

大学：戦時中

一九年一〇月から始まったわれわれの大学生活は、まさにドン底だった。ゼミに出ても「君たちみたいに出来の悪い学生は見たことがない」と露骨に罵られた。「出来る筈がないではないか」というのが私の反抗心であった。そして、出来の悪い学生生活であったが故に、自分は生涯旺盛な向学心を持ち続けたといまでは思っている。

急に軍国少年化した私は、どういうわけか経友会の委員に選ばれ、次々と兵隊にとられていく仲間の学生のために一大壮行会を開いたりした。そんな私を長坂君がどんな眼で見ているのかいまとなっては知るよしもない。僅か二ヶ月余りの学園生活は大田の中島飛行機への勤労働員という形で打ち切られた。法学部の名物教授であった末弘徹太郎（通称徹ちゃん）の厳重な抗議によってわれわれが劣悪な労働条件から解放されたのは翌年の三月であった。

しかし私は、家が強制的に壊され帰るべき家がなくなっていた。下宿を借りる余裕もない私は、ある事務員のアドバイスで経済学部の研究室を根城として住むことにした。この梁山泊はその後一〇人近くまでふくれ上がり、橋爪経済学部長の決断で千葉の平岡村に出かけるまで続けられた。長坂君は病気のため大田にも平岡村にも行かなかつた。戦後の大学では、私が長く平岡村に留まっていたために長坂君とは最も疎遠な時期となってしまった。

## 長坂君の碁と歌

長坂君の碁は、正直言つて大変下手といつて良いだろう。碁の上達は概ね始めた年齢によつて決まる。大学生で覚えてもかなり上達する人もいるにはいるが、小中学生で覚えた人にはどうしてもかなわない。プロになれるのは幼稚園或はそれ以前に始め、碁に興味を持った人に限るといつても良いくらいだ。長坂君は尋常科（中学）で覚えたからかなり上達しても良い筈だったが、結局素人の三段位で終つたようだ。

彼は日本棋院の発行する段位の乱れを常日頃口にし、大分の三段は名古屋の三段より強いし、名古屋の三段は東京の三段より強いと称していたが、私に言わせれば、彼は大分の三段であつても所詮名士三段の域を出なかつたように思う。

私（現在学士会館唯一の十段格）は、彼と生涯五目のつもりで付き合つていたが、二度ほど例外があつた。初めは彼がまだ結婚する前だつたと思うが、戸塚か保土ヶ谷あたりの駅近くの病院に入院していたときのことである。来てくれといふで行つてみると意外と元気で、病院内のニツクキ碁を負かしてほしいという依頼であつた。生憎相手が何かの事情で対局できなかつたので、長坂君自身と対局したがこの時初めて五目で破れた。長坂君は鬼の首でもとつたように喜び、それ以後はどんな時でも碁を打とうとは言い出さなかつた。それから五〇年、お互いにリタイアして府立OB囲碁会（それは毎月の第一日曜、五反田のコウポートで行われている）で出会つたとき、点数上彼は私に一一目ほど置かねばならぬ

計算であつた。どうすると聞くと、彼はそれじゃあ井目の逆コミでと言ひ、私はコミを大きくして五目ではどうかと言つたが、彼は井目を選んだ。碁というゲームは自分が不当に多く置き石をおいた場合、早く相手をツブしてしまおうとする。大抵の場合それが敗因の原因である。爾来長坂君は五反田に顔を出さなくなつた。大変悪いことをしたといまでも思つてゐる。

長坂君は歌の名手である。快いバリトンで彼の講義の内容は全く知らないが、美声で学生諸君を魅了したであろうことは想像に難くない。音痴の私は、彼が音楽部でもないのにこんなに歌がうまいとは長いこと知らなかつた。彼がドイツに新婚の夫人を伴つて留学する途中、神戸の港に寄るといふ知らせがあつた時、私は尼崎の現場にいた。大奮発してご両人を有馬温泉にご招待した。止せばよいのに当時習い始めた小唄を二曲ご披露した。彼はビックリして聴いていたのである。終つても何も言わず黙つていた。しかし元気で楽しそうに見えた。

その時にこやかに笑いながら聴いてくれた夫人と別れて日本に戻つて来た時、私も東京に戻つていて頻りに彼と会つた。この時も彼は常に快活で楽しい男であつた。歌の唄える場所を好み、女性たちをリードしながら美声を聴かせた。私が何とか合はしていくのを見て安心したようであつた。

晩年は寮歌祭の府立のリーダーとして活躍したと聞いたが、宜なるかなである。旧制高校最後の囲碁会で谷和明君（一九

年理乙)が優勝した時、ご褒美に寮歌を歌うことになった。これは旧制高校のイベントにはつきもののご褒美であるが、府立の囲碁の連中は皆うる覚えで、“銀扇空に……”が途中で止まりそうになり、他の高等学校の応援でやっと歌い終えたことがある。私は恥ずかしい思いの中で、こんな時長坂君がいてくれたらなああと切実に感じたものである。

昔、府立高校の図書室で読んだ『膨張宇宙説』という一冊は、子供心にも大きな感銘を受けた。観測される天体がすべて赤方変位している事実からこの説が公認されるまで凡そ半世紀はかかったろう。この説が正しければ“もとは？”というか“はじめは？”ということが当然問題になる。“はじめにビッグバンありき”が証明されるのは或るアメリカの学者の意図せぬ偶然の観測の結果であつたらしい。ザカリア・シツチンの著書十数冊を呼んで、私は目からウロコが落ちた。いや、コンタクトレンズがびたり目に嵌つた感じであつた。

ザカリア・シツチンはパレスチナ生まれで現在はアメリカ国籍。ヘブライ語(古典及び現代)をはじめ、数多くのセム語系、インド・ヨーロッパ語系<sup>26)</sup>の言語をマスターし、シユメール語を理解できる数少ない学者の一人であるとか。メソポタミア(イラク)のあたりから出土した粘土版を数多く読んで達した一つの結論は“聖書の記述が神話などではなく、粘土版に記録されている史実そのものにピッタリ一致している”ということである。間違いなく人間は、神“宇宙人”の

遣伝子操作により作られた！私が紀伊国屋の店頭で彼の著書を何冊かまとめ買いしたとき、居合わせた青年が“貴方も？！”と私の顔をジツと見た。その時私も“やあ君もか”と心の中でつぶやき、わが意を得た喜びを得たものである。しかし世の中には、このような青年のように眼を輝かせてシツチン説を受け入れようとする人と、コペルニクスの地動説を受け入れようとしなかった教会の連中のようにガンとして受け入れを拒む人と両極端に別れる。長坂君はこの点に関してはずいぶん教会派であつた。

もう二、三年前のことだつたらうか。彼が大変ややこしい病名で九段病院に入院したとき、いつも見舞う人であつた私は、いつも見舞われる人であつた長坂君と随分長時間に亘つて話をした。このときは過去の思い出に花が咲いたというより、むしろしんみりと来し方行く末などを話し合い、かつてなく心の底から溶け合つた数時間を過ごしたように思う。帰ろうとする私を彼が引き止めようとするうち、ついに私はザカリア・シツチンの説を長々と彼に説明する羽目になつた。しばらく我慢して聞いていた彼は突然カンニン袋の緒が切れたように怒りだし、「オレはお前なんかのそんな話を聞く耳は持たぬ」といい、最後は「帰れ」とまで言つた。七八歳と七九歳の老人同士としてはまさに大人げない言い争いであつた。

次の級会には、心配していた彼が元気で出席し、逆に私が顔に包帯をしているのを見て「どうしたどうした」と聞き、

私が『赤い靴症候群でね』ととぼけてみせると、彼は分かったような分からぬような顔をしていた。これは“転倒名人”の私が勝手につけた名前で、赤い靴をはいた女の子でなく奈良光枝の赤い靴のタンゴ（というよりアンデルセンの童話）が根拠だ。

更に次の級会で長坂君は「おい中原、赤い靴症候群なんて色々調べたがどこにも載っていなかったぜ」と言う。「そう？」と私は軽く受け流したが、これが長坂君であり私である。となれば彼が大まじめにザカリア・シツチンを振りかざす私をてんから受け付けないのも当然であつたかも知れない。しかしいやしくも学問の道を志し、ましてヨーロッパ経済史を専門にしていた彼が、人類の歴史に一片の関心も示さなかつたのは惜しみても余りある事ではなかつたかと思つのである。この上は、早く私もあの世に追いかけていつて議論をムシ返したいと熱望するものである。

（昭和二二年九月東京大学経済学部卒、元西松建設常務取締役、元大和建設取締役社長）

## 長坂 聰さんの追憶

福田 清成

長坂聰さんは旧姓府立高校で私の一年先輩である。府立高校は中高一貫教育の七年制であり、生徒数も少なかった故、尋常科時代からお互いによく知っていた。高等科では文科と理科に別れ、大  
学は経済学部と理学部であったから疎遠となったが、その後二人は不思議な縁で結ばれた。

私は昭和二九年の春、埼玉大学に奉職したが、ほぼ同じ頃、長坂さんは東京教育大学に職を得た。ところが、昭和三一年から四六年まで、ドイツ留学期間除き、長坂さんは非常勤講師として埼玉大学で講義を担当された。つまり私たちは学部こそ違え一〇年ほど同じキャンパスにいたことになる。その間何度かお会いしたが、格別深い交流があった訳ではない。ただ私たちには共通の教え子があった。

埼玉大で長坂さんの講義を聴いて感銘を受け、卒業後には教育大の大学院に進み、長坂さんの薫陶を受けて学位取得した後、埼玉大の教官として戻ってきた大野和美君である。彼は学生時代、山岳部に籍を置いた。当時、山岳部長であった私は自分の使い古した登山靴を彼に譲り、登山の心と技術を伝えた愛弟子である。

府立高校の寮歌愛好家たちが毎月第一土曜日に、

青春を懐かしむ一土会という集いがある長坂さんはその中心人物であった。私が数年前に初めて一土会に参加した折、互いの顔を見付けた二人は抱き合つて三〇年振りの再会を喜び合つた。会が果てた後有志の二次会があり、さらに長坂さんに誘われて三次会に行き、強かに飲み夜更けまで語り合つて、帰宅は午前〇時を回つた。その後も何度か二人だけで飲む機会を得た。話題は多岐に渡つたが、妙に波長が合い、心の琴線が共鳴し合うのである。すでに七五歳を過ぎた二人の斯くも豊かな交友を生んだ巡り会いに感謝したい。ここで彼の生き様における美学を語ろう。

東京教育大学が廃され、国家政策に沿つた筑波大学に変わろうとするとき、頑なに反対した一人が長坂さんであつた。彼はしみじみと語つた。「自分が大切にしてきた船が沈もうとするとき、救援に現れた大型船に我先に乗る行為は僕にはできない」と。彼は沈みゆく船に最後まで留まり、同志の仲間や門弟たちの身の振り方に温かい手を差し伸べて送り出した後、水没直前に小舟に乗り移つて、大分の地に流れ着いたのである。

第二は叙勲の辞退である。私は平成一六年秋、一土会の小田切先輩（岩手大名誉教授）と共に叙勲の栄に浴し、瑞宝中綬章を受けた。実はその数ヶ月前に打診がある。他人に話すべき事柄ではないが、二人だけで飲んだ或る夜、心を許し合える

長坂さんなればこそ、その事を打ち明けた。彼は毅然と言い放った。「僕は叙勲を拒絶したよ。何故なら、僕たちは上衣の上に首から掛けるお上からの勲章よりも、もっと輝く勲章を上衣の下のシヤツの内側に持っているではないか。常に正道を歩き、自分の納得のいく仕事を成し遂げてきたし、春秋に富む多くの青年たちに語りかけて彼らの心に篝火を灯してきた。彼らが僕たちの精神を継承して、世の中に明るい火を灯し続けている。それこそ僕たちの誇りであり、輝く勲章ではないか」。私は恥じらいながら答えた。「それは見えないけれども実は輝いている真昼の星の様ですね」

真昼の星とは、私の退官に際し、門弟たちが作ってくれた記念誌の題名である。真昼の星は空気中の微粒子による散乱光に遮られて見えないが、高山に登ると微粒子の数が激減するため、昼でも晴れた空は青暗く、星が輝いて見えるのである。教育に対する姿勢でも私たちは共感を覚えていた。一例をあげよう札幌農学校の校長としてクラーク博士が迎えられたとき、事務官たちが作成した校則見せて伺いを立てた。そこには第一条から、生徒は……してはならない。……を禁ず。という禁則のみが列挙してあった。これを見たクラークは、このような校則は無用であると一喝した。ではどうすればよいのですかと尋ねると、新校長は唯一言、「be Gentleman」と答えたという。教

育の本義は、なすなと禁ずることではなく、なすべき事を語るにある。この点において私たちの意見は全く一致した

しかもこの精神は我らが母校府立高校の校風であつたりベラリズムと「紳士たれ」に通ずるものがある。私たちは素晴らしい学校に学んだこと、そして立派な教育をそれぞれ勤務大学で成し遂げてきたことを共感し合った。

平成一七年七月一日、埼玉寮歌祭が終つた後、大宮駅の上階にあるそば屋で一緒に飲んだ。今から思えばすでに病魔に蝕まれていた筈なのに、相変わらずよく飲みよく語り合った。これが最後の別れとなつてしまった。

一三歳の少年時代に知り合いながら、純粋な人間関係の美しい火花と妙味を愉しんだのは、晩年を迎えてからの短い歳月に過ぎなかつた。だがそれは掛け替えない珠玉の時間であつた。「長坂さん」、何故僕の残して先に彼岸の国へ旅立つてしまったのですか。ゆっくり歩いて下さい。じきに追い付きますから。

(埼玉大学名誉教授(元理学部長)、府立高等学校理科甲類昭和二〇年卒業、東京大学理学部科学科昭和二三年卒業)



## 長坂聰さんの思い出

昭和二〇年卒遠藤栄一

一、旧制府立高校尋常科（旧制中学相当）時代に、渡しは剣道部と水泳部の兩部に在籍していた。長坂さんは水泳部の先輩であり、種々お世話になったが、印象に残っているのは対東高線で誉められたことと、退部の時のご配慮である。

対東高線は多分、尋常科の二年の夏だったと思うが、プレス（平泳）のの二百米に初めて出してもらった時のことである。三位、四位争いで、どうやら三位に入ったのだが、長坂さんはこの時の事を後になつてしばしば取り上げ、「最後の一五米をバタフライで逃げ切ったのがよかった。フアイトがある！」と誉め激励してくれたのであった。私自身は只無我夢中でなにをしたのか殆ど覚えていないのである。

その後、水泳シーズンもオワリとなる秋になつて、キャプテンの須崎さんに呼び出され、プールサイドで「剣道部を辞めて水泳一本でやれ」ときつい調子で言われたことがあった。私としては「満六歳より剣道を続けており、やめることは出来ぬ。水泳は夏が主体であるから両立はできる」と言いたいところだが、なぐられそうな気配を感じ、二、三日考えさせてほしいと申し出て、その場をしのいだ。そして直ちに、剣道部の東先輩に事の次第

を報告。同じく三年生の長坂さんと東さんの話し合いによつて、水泳部を円満退部できたという思い出がある。

二、時は流れて平成に入り、……

三、平成一〇年に古希を記念して……

四、平成一一年に旧制府立の創立七〇周年記念行事……

五、長坂さんには……

（旧制府立高校で長坂氏の一年後輩、七九歳）

（詫摩さん曰く、この方は水泳部員ではなかった）

## みんな過ぎ行く遠い日々の影

昭和二四年卒鈴木 毅

敗戦六〇周年の平成一七年八月五日。長坂先輩の声の聞き納めでした。機会あるごとに「一杯飲もうよ」と声をかけていたきながらチャンスを逸してしまいました。その先輩に思い出したように電話をしたのでした。支那事変から大東亜戦争、廃墟から立ち上がった日本、その未来など、幅広い視野からのお話を伺いたいと思っただけでした。

屈託のない明るい声が返ってきました。「明後日から入院だ。今度は検査だからすぐ退院するよ。退院したら飲もう。もっとも来月はまた入院、手術をしなくてはならないと思うんだが」。いつもの調子。それが最後になるうとは思いいも及びませんでした。

同じ旧制府立高等学校、わずか三歳違いですが、長坂先輩と僕の出会いには、八雲が丘の校舎取り壊しを前に平成元年十一月に催された、「校舎さよなら記念祭」の翌年、廃校から四〇年も経った冬でした。

旧制高校と言えば「弊衣破帽」腰に煮染めたような手拭い、ちびたホウ歯の下駄と相場が決まっています。が、六年制の府立高校は紳士の学校でした。長坂さんはその典型の尋常科出身、僕は敗戦で台湾から引き揚げた、台北高校からのバン

カラ転校生。後に都立総長を勤めた楠川絢一先輩は当時、母校で最も若い教師をされていて、「戦後、軍や外地校の転校生が入ってガラツと学校のムードが変わり旧制高校らしくなったよ」と言っていただけなのが印象に残っています。

脱線しました。「校舎さよなら記念祭」は創立六〇周年でもありました。そこで多くの〇四が参集して廃校後初のファイア・ストームを催し、Zエスや新聞各社が報道して全国的にも話題となりました。これを切っ掛けに翌年二月、毎月第一土曜日に寮歌を歌う有志の集い「一土会」が発足しました。府立高校には他校〇四も羨む寮歌や記念祭歌の名歌が数多くあります。戦中派の先輩が大勢加わりました。その中心の一人が長坂さんでした。

それまで「戦後派」中心だった武道館や日比谷公会堂の日本寮歌祭も、一土会が結成されてからは戦中派を混じえての大挙出演。いまは新宿に会場を移しましたが、長坂さんの朗々たる音頭で始まる府立高の第一一記念祭歌「銀扇空に」は、いまでは他校の常連にも知られる寮歌祭名物です。長坂さんはまた平成六年の創立六五周年には「旧友」後に「遠い日々」(本稿の見いだしはそもりフレイン)を作詞・作曲するほど多才・多感な若さをいつまでも保ち続けていました。

さらに戦前戦後のインターハイ当時の水泳部員でもありました。その時、府立高校が水球で全国

を制覇し、長坂さんはその祝勝街道行進の旗手を勤めたのが自慢でした。実は引揚者の僕も禪一つでできるスポーツとして水泳部の末席を汚していました。長坂さんと同じプールの水を飲んだのです。いつでしたかロス五輪金メダリストの故北村久寿雄さんのご命令で水泳インターハイ復活をはかったことがありました。北村さんは「みんな死に物狂いになるから」と「一分ゲーム(如何に六〇秒に近いタイムで五〇メートルを泳ぐか)という競泳にしました。府立の主張は、「不真面目だ」と参加しませんでした。が、長坂さん他二、三の方が参加してくださいました。

府立高校の創立七〇周年。会報「八雲」の記念号を出すことになり、長坂さんが編集を頼まれました。その時僕に「手伝ってくれ」と声がかかりました。新聞社で整理部や社史編集をした僕は否も応もありません。三軒茶屋のご自宅で、構成から原稿整理・割り付け・校正などのお手伝いをしました。同窓会が原稿を集めてしまつてからの編集長 企画にご不満もあつたでしょうが、如何ともし難いことでした。でも完成後の評判は上々でした。

そのためか、次の創立七五周年(平成一六年一〇月)でも記念号編集を仰せつかりました。今度は公開座談会の司会や纏めも担当されました。記念号の完成は平成一七年、亡くなつた年の一月で

した。筑波大問題で筋を通されたのも長坂さんらしさですが、人知れず病の体に鞭打つて、最後まで旧制高校生らしく過ごされた素晴らしい人生でした。

ところで長坂さんの真骨頂は、経験に裏打ちされた該博な知識と率直さ。ドイツ留学の思い出を交えての「座談」にありました。興に乗れば飛び出すドイツリゾートの数々：

思い出はつきません。最後に「旧友」の最後の一節を口ずさみながらお別れします。

時は移り 我ら永らえ

友と集えば 星霜はるか

春の霞を 抜け出でて

我らは朝(あした)の友なりき

尽きせぬ想いを 酌み交わすのみ

長坂先輩、安らかにお眠りください。合掌

(府立高校昭和二四年卒、読売新聞社社友)

(この方は黒潮会名簿には載っていない)